50 周年記念号に寄せて

工学部長　伊藤　洋

『山梨大学工学部研究報告』は，未だ連合国による占領下にあった1949 年，新制山梨大学発足と共に創刊された．爾来50 年を経過した．

創刊当時の出版事情は猖獗を窮め，活字はもとより印刷する紙の調達にも難儀する時代であった．したがって，学会活動ももまた混乱を極め，新制大学は出来たもののその研究成果を発表するメディアは皆無にも等しい状況であった．それゆえ『工学部研究報告』は学部が手にした唯一の研究成果発表の場に他ならなかったのである．また，当時の研究者にとって研究の自由が保証された初めての体験であり,「文化立国・技術立国」を目指す夢は気宇壮大でもあったから，悪質な紙質の「創刊号」の中に息づく清新の気は体裁の貧弱さとは裏腹に実に大いなるものであった．

時代は下り，高度経済成長の1960 年代後半ともなると出版事情は大いに改善され，いくつかの大規模な学会では分冊形式の論文誌を発行するまでになり，積滞する論分数も少なくなっていった．この時期に至って,『工学部研究報告』の性格は変質せざるを得なくなった．それでも多くの学会誌等が論文紙数に制限を加えていたから,『研究報告』の役割は全文掲載の役割を担うことでその役割を果たすことができたのでる．

1980 年代中盤ともなると国際化の波は，新たな発表の場を世界大に拡張し，国際会議や外国学会誌もまた発表の場となるに及んで本誌の存在感は愈々薄くならざるを得なくなった．役割を終えたのではないかという声も出始めて，明かにその在り方を再考せざるを得なくなって今日に至ったのである．

しかし，果たして『工学部研究報告』の存在は本当に否定されるべきものなのであろうか．

広大なサーキュレーションを誇る「権威ある」学会誌の存在は言うまでもなく重要である．だが，ローマが一日にしてならなかったように大学会も一日にしてはならなかった．これらの学会といえども，新たな学問の創造が最初にあって，それが発展して今日の隆盛につながった．その草創期の研究成果は発表の場を持ち得ず，それを憂えた少数の研究者によってその学会は創設されたのである．大学が新たな学問の創造を託されている以上，未だ権威を持ち得ない研究成果こそ時代に期待される学問でなければならない．そのとき『工学部研究報告』は有力な媒体でなければならない筈である．

ここに，50 年記念号を出版した．これが，次の50 年に向けて再度新しい学問の創造のメディアとなることを心から期待したい．